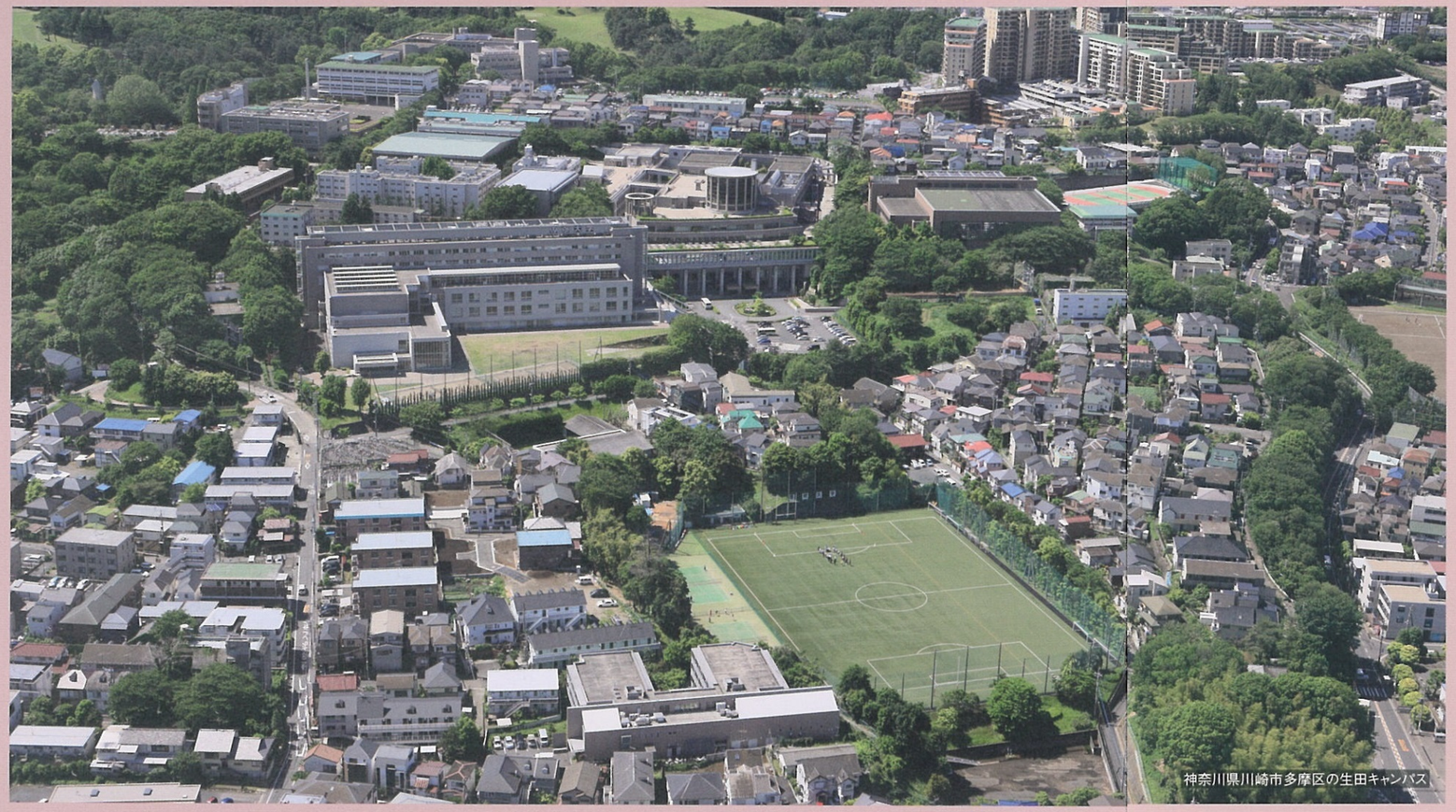
2013
Vol.
8

Si-report

専修大学のビジョンと現状

Socio-Intelligence report



神奈川県川崎市多摩区の生田キャンパス

建学の精神と21世紀ビジョン「社会知性の開発」

専修大学は、1880年（明治13年）、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによって極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」を21世紀ビジョンに据えました。

今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題は山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。

専修大学21世紀ビジョン

「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも深い人間理解と倫理観を持ち

地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力である

「魅力ある大学」づくりに向けて教育研究環境の充実を目指す

学校法人専修大学理事長
専修大学長
日髙 義博

昨今の日本においては、グローバル化に伴う国際競争の激化や少子高齢化の急速な進行などにより、変革と発展を担う人材を要望する声が格段に高まっています。この背景から、高等教育機関としての「大学のあり方」が厳しく問われ、大学の教育・研究に係る従来の仕組みの改革が急務とされています。

専修大学では、これまでも21世紀ビジョン「社会知性の開発」に基づき、深い人間理解と倫理感を持ちながら主体的に社会の諸課題の解決に取り組むことのできる人材の育成に力を入れてまいりました。そして、今後も更なる充実を目指して諸施策を推し進めていきます。

まずは、本学の個性と特色に基づく新たな学士課程教育の構築のために、教養教育と専門教育が有機的に連携したカリキュラム編成の策定に注力しています。2014年度からの教育改革の実現に向け、諸組織での検討が最優先で進められているところです。

2012年度は、「産」と「学」との連携による教育研究の一層の充実と社会貢献を目的に、小田急電鉄株式会社との連携・協力に関する基本協定、川崎商工会議所との連携・協力に関する覚書をそれぞれ締結し、産学連携の土壌を固めてきました。同年中に、小田急電鉄株式会社との寄附講座など各取り組みが始まり、今後も連携強化の拡充に努めてまいります。

また、教育研究の土台となるキャンパス整備構想も一層の推進を図ります。神田キャンパスの新神田5号館（仮称）及び生田キャンパスの国際交流会館（仮称）は2013年3月に建設着工となり、生田キャンパスにおいては、東日本大震災の影響により解体した3号館跡地などに、7階建ての大学院棟及び3階建て校舎の建設計画が進められています。

より「魅力ある大学」として社会に発信し続け、本学から世界で活躍する魅力ある人材を輩出していくために、様々な面での教育研究環境の充実に力を入れていく所存です。

Profile

1948年（昭和23年）宮崎県生まれ。70年（昭和45年）専修大学法学部卒業。法学博士。84年（昭和59年）専修大学法学部教授。2004年（平成16年）法科大学院教授。同年学長（現在に至る）。2006年（平成18年）理事長就任（現在に至る）。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験考査委員、法制審議会臨時委員、一般社団法人日本私立大学連盟監事などを歴任。専攻は刑法学。『不真正不作為犯の理論』（慶応通信）、『刑法における錯誤論の新展開』（成文堂）、『違法性の基礎理論』（イウス出版）、『読書と人生』（専修大学出版局）など著書、論文、翻訳、エッセー多数。居合道5段。

「つながり」を発展する　— Topics —

小田急電鉄と連携協定を結び、社会貢献へ邁進する

小田急電鉄と連携協定

小田急線向ヶ丘遊園駅は、専修大学生田キャンパスの最寄り駅です。この身近な駅を中心とした小田急沿線地域で、専修大学ではこれまでに様々な教育研究活動を行ってきました。その繋がりをもとに、小田急電鉄株式会社と専修大学は、連携・協力に関する基本協定を締結しました。

小田急電鉄では、企業の社会的責任（CSR）を経営の根幹に掲げ、小田急沿線を中心にグループによる広域的な事業を展開するとともに、社会貢献活動を積極的に推進しており、その一環として、沿線の教育機関との産学連携に取り組んでいることから、今回の運びとなりました。この協定の締結により、両者の連携による「寄附講座の開講」、「学生インターンシップの強化」、「学術研究や教育活動の実践」などをはじめ、教育・研究や地域貢献活動を積極的に進めていくこととなります。調印式は2012年4月20日、東京・新宿にある小田急電鉄本社で行われ、小田急電鉄の山木利満社長と日髙義博学長が新たな産学連携への期待を胸に握手を交わしました。

● 寄附講座で社会知性の開発へ

小田急電鉄株式会社寄附講座「地域と共生する小田急グループのCSRと事業戦略」は、2012年度の前期に開講。小田急電鉄社員が講師となる第1回目の講義は4月24日に行われ、大須賀頼彦小田急電鉄会長が教壇に立ちました。講義テーマは「小田急グループの過去・現在・未来」。小田急グループの歴史や地域とともに発展することを目指してきた経営理念などについて語り、「最近の若者は失敗を恐れるあまり困難なことに挑戦しないようだが、何でも見て、トライしようという前向きな姿勢が大切。自分の人生を誇れるように積極的に学生生活を過ごしてほしい」と受講した学生に向けてエールを送りました。

小田急電鉄寄附講座

小田急電鉄社員の担当講義は全13回。経営企画部や旅客営業部、運転車両部などから現役の社員が担当し、グループの事業戦略や沿線観光地への誘客戦略、ロマンスカーの開発などの多岐にわたるテーマで授業を展開。最新の情報が聴講できるとあって、履修登録学生数は412名にもなりました。この寄附講座は2013年度も前期に開講されます。

● 課題解決型インターンシップが学生を成長させる

実社会に踏み出す前の学生たちは、様々な可能性を持っています。小田急電鉄との課題解決型インターンシップの取り組みも新たに加わりました。

課題解決型インターンシップは、キャリアデザインセンター主催で行う専修大学独自の長期インターンシップです。地域の企業や団体、商店街が抱える課題に学生たちが主体的に取り組み、解決策を提案します。2012年度のプログラムの一つとして小田急電鉄も参加。「若い世代へ発信!!"将来、小田急沿線に住みたい!"と感じてもらえる企業PRの企画・立案」の課題が掲げられ、応募した学生14名が、5月から12月の8カ月間に亘り真剣に取り組みました。

学生たちは、A・B・Cの3つのチームに分かれ、それぞれに活動を実施。若い世代をターゲットとした企画・立案ということから小田急電鉄寄附講座の履修者を対象にしたアンケート調査の実施、また、沿線別所要時間の比較などのデータ分析も駆使して企画を練りました。12月12日には、小田急電鉄本社において最終報告会が行われ、学生たちの、まさに心血を注いだ企画が発表されました。Aチームからは、小田急グループのホテルを訪れて飲料水の源泉を探すミステリーツアー、Bチームは小田急沿線を舞台に描かれたアニメとのタイアップ企画、Cチームは人気の街の特色などの分析結果から効果的なPR方法の提案がされました。最終報告会に参加した小田急電鉄の担当者からは、厳しい指摘がありながらも「着眼点やテーマ設定に工夫がみられた」「斬新な発想力がある」との講評。この報告会で受けた評価や企業人からの意見は、学生たちの今後の成長の糧となります。

課題解決型インターンシップ

小田急電鉄と専修大学による産学連携の取り組みは、大きな可能性と成長の場として今後も期待されます。

川崎商工会議所と覚書締結　—世界経済の活性化へ—

川崎商工会議所と調印

「世界経済を活性化させるような人材を生み出すことができれば」との意気込みのもと、川崎商工会議所と専修大学は連携・協力に関する覚書を締結しました。調印式は2012年5月31日。川崎商工会議所の山田長満会頭と日髙義博学長は固く握手を交わしました。

川崎商工会議所と専修大学の交流は2007年から行われており、同会議所が展開する「川崎インターンシップ事業」の立ち上げ当初から参加しています。この事業は、次世代の"川崎経済の担い手"となる人材の育成を目的に、川崎商工会議所と川崎市内の大学・企業が連携して行っているもの。こうした交流の継続を土台に、未来へ向けた双方の更なる発展を目指し、この度の運びとなったのです。

この覚書により、両者の産学連携の絆を強固にし、川崎経済をけん引する有為な人材を輩出していくことが望まれます。更に、新たな社会経済や地域社会づくりに向けた政策研究の実施や、専修大学が進めているベトナム、ラオスなど東アジアの企業研究プロジェクトの活用も期待されています。（2013年5月、「メコン地域五カ国域内における現地中小企業の貿易活動の調査」共同事業を実施予定。）

川崎商工会議所が大学と包括的な覚書を締結するのは、専修大学が初です。このため、山田会頭は「豊富な知的資源やネットワークを活用させていただき、魅力ある川崎を国際産業都市にしていきたい」と。日髙学長も「学生たちを実学の現場に送ることができ、交流が促進される」と応じ、今後の活動が期待されます。

高野辰之の人生に迫った展示会を開催

兎追いし　かの山／小鮒釣りし　かの川／夢は今も　めぐりて／忘れがたき　ふるさと。故郷を懐かしむ心情をつづった唄です。東日本大震災後によく耳にするようになりました。作詞は高野辰之。「故郷」「朧月夜」など、後世に歌い継がれる数多くの名曲を残した作詞家で、専修大学の校歌も彼の手によるものです。

高野辰之と縁の深い本学は、宮城県石巻市および石巻専修大学とともに、その業績を顕彰しようと、仙台市の東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）において、「唱歌斉唱-『故郷』の作詞者・高野辰之の生涯-」と題した展示会を開催しました。開催期間の2012年12月1日～16日には、高野辰之の創作ノートや日記、手紙など、およそ80点にもおよぶ資料が展示され、訪問者は高野の人生に思いをはせました。

高野辰之展会場

唱歌作詞家として名の知れ渡った高野辰之は、国文学者として、当時「俗文学」と呼ばれていた江戸期の文学や演劇・歌謡の研究などに一生を捧げた人物でもありました。12月9日には、高野の生涯と業績をたどるシンポジウムを同ホールにて開催。講演者の一人、近世文学を専門とする板坂則子文学部教授は、「元禄期を中心とする江戸文学研究の基礎を築いた人物であり、その実証的な研究成果は、いまだに多大な影響を与え続けています」と、その功績を評価しました。また、高野辰之の孫にあたる東京工大名誉教授・芳賀綏氏がビデオで登壇し、「豪放磊落な半面、涙もろいところがあった。教え子や家族などに無限の愛情を注ぎ、気持ちの細やかな人。学は人なり、芸術は人なり。彼の人間性抜きには学問も作品も理解できないのではないでしょうか」とその人柄を振り返りました。

記念演奏会の様子

開催期間中の12月1日（仙台市）、15日（石巻専修大学）には記念演奏会が開かれ、多数の団体が参加し、「春の小川」や「故郷」など、高野の代表曲を披露。聴衆は、それぞれの情景を思い描きながら歌声と演奏に酔いしれました。

学生を基本にすえた大学づくり
—未来へ羽ばたく学生への支援—

学びを促進させる新たな教育空間の創出 —神田・生田のキャンパス整備—

● 創立150年に向けて学生の学習環境を整備・拡充

「社会の屋台骨を支える有為な人材の育成と輩出」は、専修大学の4名の創立者が志し、これまで130年余りの歴史の中で受け継がれてきた本学の使命でもあります。この使命の遂行には、時代に即した学習環境の整備・拡充が重要であることから、専修大学では中・長期的な視野に立ち神田及び生田のキャンパス整備を推進しています。本学の事業計画も“2013年度からの3か年は「創立150年に向けた着実なレールを敷く」”ことを目指して策定されており、キャンパス整備計画も具体的かつ着実に進められていくことになります。

まずは、「考える・まとめる・情報を獲得する・交流する・表現する」ための学習支援機能を盛り込んだ新神田5号館（仮称）、そして、生田キャンパスの新たな異文化交流拠点としての国際交流会館（仮称）が、キャンパス整備計画の第一段階として2013年3月に建設着工しました。また、生田3号館跡地への新生田大学院棟（仮称）の建設計画が進行しています。

更に、都心のキャンパスでの充実した学習環境が求められていることから、創立140年を迎える2019年を目標に神田キャンパス隣接地への新校舎建設等の検討が鋭意進められています。

● 神田キャンパスでは「新神田5号館（仮称）」が着工

神田キャンパスでは、法学教育の集約により、法学部の1年次生から4年次生、大学院法学研究科、専門職大学院（法科大学院）までの一貫した学びの場となっています。また、二部（夜間部）の経済学部・法学部・商学部の学生も同キャンパス内で学んでいます。

神田キャンパスに建設される新神田5号館（仮称）は、地下1階・地上7階建て。学生たちの交流を促すラウンジや、ディスカッションルーム、情報端末を配したメディアラウンジ、最新設備を備えた教室を持つ校舎となります。2013年3月には地鎮祭が執り行われ、完成は2014年3月を予定。明るく開放感ある空間に、知的好奇心に充ち溢れた学生たちが集う豊かなスペースが生まれます。

新神田5号館（仮称）イメージ

生田大学院棟（仮称）イメージ

国際交流会館（仮称）イメージ

● 生田キャンパスには「大学院棟（仮称）」と「国際交流会館（仮称）」

生田キャンパスでは、2011年3月の東日本大震災の影響により、損傷を受けた3号館（1964年竣工）を解体いたしました。現在、この跡地に、生田大学院棟（仮称）を建設する計画が進められています。

大学院の教育・研究は、6号館が利用されていますが、校舎の老朽化が進行していることから、環境設備の改善が求められていました。このため、専修大学大学院の教育研究活動の一層の充実を目指し、大学院機能を3号館跡地の新校舎へ移転させることになります。新校舎の構想は、地上7階建ての高層棟に大学院教室や教員研究室、事務関連諸室を配します。また、2号館は2013年度中に解体工事が着工される予定となっており、この跡地にはラーニングスタジオ等を配した地上3階建ての低層棟を計画。生田大学院棟（高層棟）と高架式の連絡通路で連結されます。

国際交流会館（仮称）は、地下1階・地上3階建てで2014年4月に完成予定。主に海外からの留学生対象の寮として利用されるほか、この会館を拠点として留学生や海外からの研究者と学生・教職員との異文化交流の場となります。学生にとっては大学内で留学体験のできる施設となるでしょう。

学生の未来へ向けた支援 —就職課『アナウンサー講座』—

アナウンサー講座受講生として活動

● 充実した学生生活の成果を社会へ

大学では、授業やゼミナール、インターンシップ、留学など様々な活動に取り組み、知識や体験を得ることができます。自分の知的好奇心の赴くままに、専門分野の学習を深めることもできれば、学習にとどまらずサークル活動やボランティアなどに取り組み、幅広く見聞と教養を身に付けることもできます。このような充実した学生生活の成果となる進路選択の一つが「就職」です。

専修大学就職課では、学生が就職活動に取り組むにあたり、様々な支援を行っています。その支援の根本は、「自分で考えて物事を判断し、行動する力」を育むこと。社会へ出れば、自ら課題を見つけ解決策を探る力、率先して行動し成し遂げる力が求められます。就職活動は、それらの力が試される場。学生たちが面接などの採用試験で本来の力を発揮できるように、就職課スタッフも様々なサポートを行っています。

3年次前期には就職活動の中でも準備に時間がかかる「SPI試験対策講座」、「文章力養成講座」をはじめ、「一般常識会得講座」、「ビジネスマナー講座」等を実施します。後期からはより実践的なプログラムとして「就活基礎講座」、「業界研究入門」、「就職合宿研修会」、「学内企業説明会」、「就活直前講座」など多数実施します。また、年間を通じて個別就職相談が行われ、学生一人ひとりの疑問に応えアドバイスを行います。内定を得た4年次生が就職活動を開始したばかりの3年次生の相談にのる「学生就職アドバイザー」も人気の支援プログラムです。

● 多彩な就職支援のひとつ「アナウンサー講座」

一般企業を目指す学生への就職支援の他に、アナウンサーを目指す学生のための支援プログラムとして「アナウンサー講座」（有料）を実施しています。

「アナウンサー講座」は1年次生から4年次生までを対象とし、発声発音の基礎から原稿読み、カメラ実技など、プロのアナウンサーが講師となり、アナウンサー職の採用試験に必要なスキルを徹底して特訓します。受講条件は、「アナウンサー職を“強く志望”している学生」。最終目標達成のために、諦めない確固たる意志と継続力、忍耐力が求められます。この厳しい条件を乗り越え、受講生の中から難関といわれているキー局のアナウンサーも輩出しています。（これまでに日本テレビ放送網・NHK釧路放送局・静岡放送・南海放送などのアナウンサーを輩出。）

●アナウンサーの夢に向けて—文学部 五十川さんの活動—

「アナウンサー講座」受講生の一人、文学部人文・ジャーナリズム学科3年次の五十川裕明さんは、アナウンサーになるという夢に向け、自分の中の「引き出し」を増やすために様々な活動に積極的に取り組んでいます。宮城県石巻市への「ふれあいボランティア」にも参加し、傾聴ボランティアとして被災地の方々の声に耳を傾けた際には、テレビや新聞からイメージしたものとは異なる現実の姿を知り、「事実に誠実に向き合わなければいけない」との気持ちを強く持ったと言います。また、2012年のロンドンパラリンピックでは、ロンドンのトラファルガー広場でパラリンピック取材に挑戦。障がい者スポーツを取材するNPO団体の代表者と面識を持ったことから実現したロンドン行き。費用は自己負担でしたが迷わず飛び込みます。片言の英語ながら必死に取材に取り組んだ体験、ハンディがありながら世界の舞台で活躍する選手との出会い。五十川さんにとって衝撃であり、同時に大きな「糧」となりました。

パラリンピック柔道選手と

強い想いを胸に、夢へ向かって力強く前進し意欲的に吸収する。未来へ羽ばたこうとする学生たちを専修大学は応援します。

視点 1

社会知性を育む教育

地域・企業・住民を繋ぐゼミ活動ー経済学部 遠山ゼミナールー

中小企業訪問通じて地域振興に貢献

遠山ゼミによる発表会

「ワカ者、ヨソ者、バカ者、これが地域振興の三種の神器です。学生はワカ者でありヨソ者にあたります」と話すのは経済学部の遠山浩准教授です。「川崎市の中小企業への訪問を通して地域振興に貢献する」をゼミ活動の一環としています。

遠山准教授は学生の役割について次のように話します。「地域というのは閉鎖的な側面をもっています。とくに川崎市にある中小企業は高度な技術力をもっていながら、これまで親会社だけを見て事業を展開してきた企業が多く、取引面では横のつながりも薄いのです。横のつながりを少しでも強くするだけで、さらに発展する可能性があります。一方、同じ地域に住んでいる住民は、地元の企業や歴史について知っている人は少なく、オンリーワンの技術を持つ優れた企業が自分の住む地域で活動していることを知りません。学生には『地域・企業・住民』を繋ぐメディアになってもらいたいと考えています。若い発想を持つヨソ者だからこそ新しい風を送り込むことができます。」

地域活性の起爆剤として活躍するゼミ生たち。これまでに、川崎フロンターレの協力を得ながら町工場の優れた技術を伝える「ものまちプラザ」、学生が中小企業の魅力を紹介するシンポジウム「メイドイン川崎」などを開いてきました。「どうしても企業と住民との間には距離ができてしまいます。中小企業の事業について知るきっかけがないからです。『ものまちプラザ』は、地域企業を知ってもらう場を提供するイベント。学生や川崎フロンターレの関係者がワークショップや紙芝居に参加することで、企業と住民の距離を縮めることができたと思っています。」

「ものまちプラザ」の様子

「気づき」そして「行動」へ

また、学生が企業訪問することが、中小企業にとって効果的だと遠山准教授は言います。「ゼミには、間違っていても構わないから訪問先企業に提言する、というルールがあります。このルールが企業にとっても気づきとなるのです。例えば、女性に優しい会社だと謳っていながら、実際には女子社員専用の休憩室がないことを指摘したゼミ生がいました。この提言によって、休憩室が設けられたということがあります。」

学生たちにとっても、企業訪問は、そこに至るまでの準備を含め、社会経験を積み、人間力を高めることのできる貴重な活動です。ゼミでは、年間のスケジュールは遠山准教授が組みますが、それ以外はすべて学生たちに任せられています。「大枠のなかで自由を与え、期限だけ設定すれば、あとはゼミ生が自主的に行動します。彼らは行動できないのではなく、行動する機会がないだけなのです。」

学生たちは、この方針に最初こそ戸惑いますが、次第に見違えるように成長していきます。「テスト勉強であれば、一夜漬けで赤点は免れるかもしれません。しかし、実社会ではそうはいきません。挨拶やマナーも必要です。結果に関して言えば、相手の期待値を上回らないといけませんし、お互いに足りないスキルを補填しながらチームで動くことも求められます。一朝一夕では身に着かないスキルばかりです。」

遠山ゼミの活動では、中小企業への訪問となるため、直接、社長の話を聞き、考え方や行動を知ることができます。そして、社長から話を引き出すためには、聴く能力を高める必要があります。企業訪問が終了すれば、報告書としてのレポート作成。これは、書く力と伝える能力が求められます。このような一連の活動を通して、「聴く・話す・書く」という実社会で必要とされるスキルを習得します。実社会に飛び込み体験することで人間力を高め、生きた経済学を学ぶことのできるゼミナールなのです。

「ふれあいプロジェクト」を通し被災者と心を寄せ合う

今一番欲しいものは「自分の家」。こう答えたのは、東日本大震災後、仮設住宅に住む子どもでした。

「ふれあいプロジェクト」は、宮城県石巻市にある仮設団地の集会所を訪問し、現地の方々の声に耳を傾ける傾聴ボランティア活動です。文学部人文・ジャーナリズム学科の学生を中心に、これまで40名以上が参加してきました。この活動の発端は、2011年の秋に、文学部の藤森研教授が同市のボランティア団体から受けた相談でした。授業で呼びかけたところ、十数人の賛同者があり、有志による活動が始まりました。

主な活動は、2～3日の間、集まった方々とお茶を飲みながらお喋りをし、子どもたちと遊ぶことなどです。しがらみのない学生たちには、被災した方々の気も緩むのか「あの日のことを初めて話しました」、「津波に追われる坂道で人をひいて逃げたトラックもいたのよ」など、胸のつかえを少しずつ語ってくれます。

被災地でのこうした活動は、学生たちに様々な問題を投げかけます。山口南さん(文学部4年)は「かける言葉が見つからず無力な自分に、今やっていることが正解なのか複雑な気持ちになりました。しかし、子どもたちの笑顔や、私たちに伝えに来てくれた人たちの想いに触れ、復興を祈るだけではなく、みんなで考え続け行動していきたい、と強く思いました」と話します。

集会所での「ふれあいプロジェクト」

藤森教授は、「“子どもたちに『また来るね』と伝えながら、もう行かないということだけはしたくない”という学生たちの言葉には、彼らの強いパワーを感じました」と称賛します。人と人が真摯に向き合う「ふれあいプロジェクト」は、学生たちを大きく成長させています。

全日本女子バレーボールチームのアナリスト渡辺氏が特別授業

全日本女子バレーボールチーム専属アナリストの渡辺啓太さんが、2012年12月11日、ネットワーク情報学部の特別授業で260名の学生を前に講義を行いました。

渡辺さんは、本学のネットワーク情報学部を2006年に卒業。在学中から全日本女子バレーボールチームの試合に帯同し情報分析に携わっていましたが、現在では専属のアナリストとして活躍しています。特別授業のテーマは「全日本女子バレーのオリンピックに向けた情報戦略」。アナリストは、選手の特徴などの膨大なデータを丹念に収集し、複数のデータを読み解いて監督や選手に分かりやすく伝えることが重要な仕事です。試合では、専用の分析ソフトを用いて選手やボールの動きを瞬時に情報端末へ入力し、試合戦略を組み立てるためのデータを監督に提供。講義では、これらの仕事内容を紹介しながら、スポーツにおける情報戦略の意義と重要性を語ります。

『IT(情報技術)をバレーボールに生かす』、これは渡辺さんが入学前から抱いていた目標です。この目標の実現のために、多くの出会いと支えを得ながら大学時代をバレーボール漬けで過ごし、本気で取り組んできました。「大切なのは目標を設定すること。そして自分が決めた目標に向かって強い覚悟をもって取り組むこと」と学生たちへ向け、力強く語りました。

日高学長へオリンピック報告

渡辺さんは、全日本女子バレーボールのオリンピック銅メダルを日高学長へも報告。「大学で学んだこと全てが大舞台で生かされました」と話しました。世界の大舞台で活躍する渡辺さんは、2013年度より本学経済学部の非常勤講師として、授業を通じ学生たちに強い想いを伝えていくことになります。

視点 2

知の発信のための研究開発

被災地復興へ向け、シンポジウム「協働社会へのチャレンジ」を開催

社会知性開発研究センターの研究拠点の一つである「社会関係資本研究センター」（研究代表者 原田博夫大学院経済学研究科長・経済学部教授）が、被災地復興をテーマに、シンポジウム「協働社会へのチャレンジ～被災地における社会関係資本を活かす試み～」を2012年7月14日に開催しました。社会関係資本研究センターは、2009年度、文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、日本を含む東アジアを対象に「コミュニティ」「セキュリティ」「市民文化」の3つの観点から総合的に分析・研究を行うプロジェクトです。

シンポジウムでは、まず「被災地・石巻からのレポート」として、石巻専修大学経営学部の李東勲准教授などから「平等の名目による弊害」、「ボランティア支援の格差」、「孤立する被災者」といった実態が報告されました。続いてのパネル・ディスカッションでは、パネリストと会場が一体となり、復興に向けた様々な意見交換が行われました。パネリストの大矢根淳人間科学部教授からは、「被災地で求められているのは、一義的な公共事業としての高台移転ではありません。地域の人々や文化のもつ“らしさ”を活かし、地域産業やコミュニティを再興していく必要があります」と、復興への鍵となる発言。会場では、地域の力による復興への歩みと問題点について真剣な論議が行われました。

パネル・ディスカッションの様子

川崎市内に唯一現存の前方後円墳を研究

井田伊勢台古墳群

神奈川県川崎市高津区蟹ヶ谷の古墳群から、6世紀後半とみられる前方後円墳が発見されました。この古墳群では、これまでに古墳3基が発見されていましたが、このうちの1基が前方後円墳であることが判明。川崎市内では唯一現存する貴重な古墳です。

この調査研究を進めているのが、文学部の土生（はぶ）田純之教授と高久健二教授です。「川崎市という大都市に前方後円墳が形を残しているのは奇跡に近い」と話す土生田教授は、考古学が専門分野。専修大学・日本大学の研究者からなる「多摩川流域遺跡群研究会」の代表も務めており、高久教授らと共に今回の発見に伴い川崎市と連携して本格的な調査を開始しています。調査期間は、2012年度から2016年度の5年間。今後の調査により、副葬品等が発見されれば、この地域で古墳時代に勢力を誇っていた有力豪族と大和政権との関係性などが解き明かされるのではと期待されています。2013年3月には、蟹ヶ谷古墳群の現地見学会も開催され、古墳群の測量調査の状況などが地域住民に広く公開されました。

土生田教授は、2012年12月開催の川崎市多摩区制40周年記念の公開講座「三大学知的探訪」（明治大学・日本女子大学・専修大学による連携講座）でも、「川崎の古墳を考える」をテーマに講演。研究成果を地域社会へ還元していくことにも力を入れています。

加瀬山3号墳

視点 3

社会知性の開発を担う人材の輩出

サッカーと経営学両立が自信に結実

(株)川崎フロンターレ サッカー事業部運営グループ 高尾（たかお） 真人（まさと） さん（2007年 経営学部卒）

専大時代は経営学部に学び、サッカー部で活躍。勉学とスポーツの両立が、サッカーJリーグ・川崎フロンターレのスタッフとして仕事を進める上で自信につながっている。

サッカー部の練習は午前6時から。千葉県船橋市の自宅を出てJR船橋駅から始発電車に乗り生田キャンパスの北グラウンドに駆け込んだ。ポジションはMF。攻撃的で魅力的なサッカーを唱える源平貴久監督、岩渕弘幹コーチに鍛えられた。メンバーは関東リーグ1部で奮闘。前々シーズン、後輩たちが関東リーグで優勝、さらには“全国制覇”を成し遂げた礎を築いた。

川崎フロンターレが主催するサッカースクールで子どもたちを教えたこともある。後に就職する同クラブとは、学生時代から縁があった。

管理会計が専門の櫻井通晴教授（現・名誉教授）指導のゼミに入った。CSR（企業の社会的責任）を研究し、会計にCSRがどう結びつくかを探った。大学対抗の論文大会に出場、ゼミ長も務めた。専大卒業後は一念発起してカナダに留学、バンクーバーの大学でMBA（経営学修士号）を取得した。なかなか上達しなかった英語の力は、町の「草サッカーチーム」に入ってからグングン伸びた。

「君ならできると、最初から分かっていたよ」。海外でMBAを取ったことを恩師・櫻井教授に報告したところ、あっさりとそう返された。

「大学時代は、自分の心構え次第で何にでも挑戦できる。ためらわずいろいろなものを吸収して」。それが、確固たる土台になる。後輩へメッセージを贈った。

（「ニュース専修」より転載）

専大時代の体験が栄養学研究に役立つ

甲子園大学栄養学部 専任講師 宮本（みやもと） 啓子（けいこ） さん（1992年 法学部卒）

「学生時代の学びや体験が今の研究の基盤になっています」。専大で法学を学び、管理栄養士から学者の道に入った。

老年栄養学、臨床栄養学、フードマネジメントを専門に、甲子園大学（宝塚市）の教壇に立つ。専門分野に臨む時、社会の規範である法学の存在が根底にあることを実感する。

宝塚市の出身。「中学の社会科教師をしていた母から、『女性も一生を通じて働ける職をもつことが大事』と常々言われました」

高校卒業後、故郷を離れ専大に入学、日髙義博教授（現学長）指導の刑法ゼミに入った。「学生の目から見ても『新進気鋭の先生』という感じ。学生一人ひとりを、きちんと見てくださる方でした」と振り返る。

栄養学に興味を持ったのは専大在学中だ。「一人暮らしで食生活が不順な上にダイエットで体調を崩してしまって。食の大切さを認識しました」。

卒業後、都内の栄養学校で学び、栄養士、そして管理栄養士に。その間、病院や高齢者施設、給食配給会社などで実務経験を重ねることで現場が抱える問題に興味が募り、栄養学への探究心が深まった。国際医療福祉大学大学院福祉課程で医療福祉を修め、さらに静岡県立大学大学院生活科学研究科で栄養疫学の研究に取り組み、博士後期課程満期退学。3年前から現職に。

「人に教えるには今の3倍学べと言われたことを肝に銘じています」。研究室に集まる学生たちを、20数年前の自分に重ね合わせている。

（「ニュース専修」より転載）

「Si-report」とは

「Si」とは……

「社会知性:Socio-Intelligence」の頭文字［S］［I］

と

「SENSHU Intelligence」の頭文字［S］［I］

を表現しています。

専修大学の社会知性をリポートしていきます。

シンボルマーク&カラー

Sの字は専修大学の[S]と21世紀ビジョン「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」の[S]であり、そのSのブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。

マスコット

専修大学マスコット
「センディ」

体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるように更にかわいらしくデフォルメしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学のシンボルマーク&カラー・マスコットは2004（平成16）年に制定されました

専修大学　学長室企画課

（神田校舎）〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8
（生田校舎）〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
Tel:044-911-1252　Fax:044-900-7803
http://www.senshu-u.ac.jp/